

編集後記

本号をもって「総合リハ」は第12巻を完結することになる。その間いろいろなことがあったが、やはり12カ月一区切という時期には違いなく、大きく成長して行く子供を見るような気持ちがしないでもない。

この号のテーマは「末梢神経損傷とリハ」である。ややこしい中枢神経とは異り、末梢神経は損傷イコール麻痺というパターンが定まっており、取りつきやすい課題ということもできるが、内容を見ていただくとわかるように、かなり面白いテーマがまだ多く残されている。

お断りしておきたいのは、予告に示された米本氏の「末梢神経損傷修復と筋の組織学的変化」が氏の急病により掲載できなくなったことである。入院中の氏の平癒を心から御祈りすると同時に読者の皆様に御詫び申し上げる。

しかし他の論文はいずれも新しい情報を得るためには得がたいものばかりである。

川嶋氏の知覚の central adaptability に関する論文は Highet の基準を用い、年齢差のあることなどについて述べている。今後は何等かの方法により中枢側からの検討も必要であろう。

山野氏の神経再生時の軸索流、伝導速度、運動機能に関する論文は同時的に全てを検討

することは不可能にしても時期的な比較から興味ある観察結果について報告している。

伊地知氏のテーマ「末梢神経損傷修復後の運動機能変換」は、言うなれば基礎と臨床を連結するものとして注目される。昨年10月に名古屋で開催された国際末梢神経症のシンポジウムで、ポリイティスの発表した neurotrophic factor の存在を示す実験結果と併せて考えると興味深い。

末梢神経損傷と機能訓練に関する本田氏・他の論文はどちらかというと啓蒙的である。知覚訓練、バイオフィードバック療法、筋力増強訓練等を網羅し、将来の研究分野の広いことを暗示するものであろう。

畑野氏・他の低周波刺激に関するものは、氏の主な研究分野の1つとして知られているものであり、期待していた通り、立派な総説である。

他の諸記事の中で吉村氏の木製ソケットの報告を掲載できたことは私にとって嬉ばしい。材料に対する信頼性はソケットのみならず他の部分品についても調節範囲が広いことや、長い経験的なつみ重ねがあることから仲間味のある義足を作ることができるからである。

寒さに向う折から読者の皆様の御健康を御祈りし、筆を収めたい。(明石 謙)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告 (第13巻 第1号)

特集 神経心理学

神経心理学序説……………京大精神科 大 橋 博 司
神経心理学のリハビリテーション

への応用……………慶大・精神神経科 鹿 島 晴 雄

最近の神経心理学における2,3の基本的問題と

めぐって：脳のエコロジー領野と中心回

の失語学的意義、非流暢性の概念……………京大・精神神経科 浜 中 淑 彦

失語症への神経心理学的アプローチ……………東京都老人総合研 笹 沼 澄 子

巻頭言 昭和60年代展望……………東海大 村 上 恵 一

研究と報告 起立動作開始前にみられる Silent period の出現率と

その持続時間について：健康人と片麻痺患者との

比較……………川崎医大 平上二九三・他

症例報告 リハビリテーションセンターで治療を行った

転換ヒステリーの1症例……………慶大 蜂須賀研二・他

講座 リハビリテーション医に必要な全身管理

(1)全身管理(総論)……………川崎医大 長谷川 寿美玲

リハビリテーション医学と性の問題 (1)(総論)……………横市大 大 川 嗣 雄

一頁講座 義肢のパーツ (1)義足の部分品……………川崎医大 明 石 謙